大野關堰人柱の七不思議

今を去る三百數十年の昔、春まだ淺いころ、大野關堰の水がかり百姓達數百人が打揃ふて神佛に三七二十一日の祈願を籠めそして託宣を承けて救ひを求めたことがあつた。

それはその年の前年、（或る古書に元和五年とあり）もう稻の花をさまりがして黄熟をひかへた頃、非常な豪雨があつて大切な大野關堰の堰が洪水のため決壊し無慘にも稻田といふ稻田は悉く流されてしまつて一粒穫らずの大凶作であつた。往古の大野關堰は今のやうに設備のない危しげなものであつたから洪水の出る毎被害があつて稻作も思はしくなかつたが、この年の被害の甚大なことは前古未曾有であつたから迫り來るものはおそろしい飢饉、恰も奈落のどん底につき墜されたやうなものがきと喘ぎとがあるばかりで何等の施す術もなく、それは〳〵名狀のできない悲慘なものであつた。

人間は窮乏すると最後神佛に縋りつくのが人情で、ひもじさをこらへて三七二十一日の祈願を遂げた滿願の日の託宣に曰く「吾は大日如來なり年々洪水嵩み大野關

堰の堰破れて難を郷に及ぼすは龍神の祟りなり、此の祟りを拂はんには三歳の牝牛に妙齢の巫女を乗せ牲として龍神に捧げよ」とあつた。一同はその託宣に従ふべく誓ひ、肝煎忠右衛門等はその牝牛と巫女を求め得べくあちこちをさがし廻つた。かくて三歳の牝牛は尋ね當つたが牲牢にすべき巫女は仲々なく早や契ひの祭祀の日は切迫し郷中の焦慮一方でなかつた。ところが漸く小白川の長兵衛と云ふ者の處にゐた美女お小夜は巫女だつたので、それに白羽の矢が立てられたのであつた。お小夜は飢饉の時南部から越えて來て病める母親の薬餌に身を長兵衛のもとに沈めて居たもので、その容姿の艶麗さは古の佐與姫に似たとかで一同いたくよろこび事情を述べて犠牲になられんことを具さに請ふた。お小夜は、此の怖めしい牲の身となることに應ずる向もなかつたが、再三再四の歎願に、此の身の犠牲が一郷の甦生にかゝれることを自ら悟り遂に意を決してその求めを容れたので、郷中漸く愁眉をひらいた。誓ひを立てた捧祀の日のお小夜は、髪に胡麻の油をつけて麻糸にて結へるなど死出の粉飾をこうし、それより亡き母親の佛前に額づいてこの事を告げ、涙を佛つて健氣にも最後の食事を済まし、やがて迎ひに來た、牝牛の背に乗り多くの村人達に送られてついた處は大野關堰の邊り、春の陽も早や薬師嶽の彼方に傾き、咲

きほこる辛夷の花に、さつとくる無情の風、哀れ花と共に散るお小夜が身こそ、郷中永遠のための尊き而かも涙ぐましき牲ではあつた。

かくて巫女に扮したお小夜は、その牝牛に乗つたまゝ莞筵を敷いた大きな水槽（ひつ）の中に入れられ其の上を井桁でかたく抑へつけられ水中深く生埋めにされたのである。一郷又若き牲牢を捧げて漸く安堵し、そこには更に頑丈な堰止（とめ）を築きあげ、彼女の守り本尊大日如來をば一宇の堂を建てゝ厚く祭り、そして大野關堰の水がゝり一同は神霊の加護を禱ると共に牲になつたお小夜の義心に報ゆる爲め長へに七つの禁斷を誓つたのである。即ち牲に用ゐた故を以て巫女を養育せぬこと、牛を飼はざること、水槽を用ゐざること、井桁を据ゑた井戸を設けざること、胡麻を蒔かざること、麻を蒔かざること、藺草を培かはざること、この七つの禁斷の内一つでも破つた時は其の家七代に亙つて七つの不思議な祟りがあると傳へられ、現今といへども誰一人この禁斷を破らうとする者はない。爾來享和元年辛酉の六月、安政元年甲寅の六月十八日の洪水等にも難を免れた。昔は毎夜のごとく大野關堰のほとりから悲しくも奇しき女の叫び聲がきこえた。この叫び聲こそ人柱お小夜の鬼哭であると稱し、禁斷の前に守誓の眸を光らしたのである。巫女を假葬したといふ墳は現今小白川の上田といふ處に在り又牝牛を繋いだと謂ふ處を牛森と稱してゐる。